

## 論文試験の結果の要旨

論文提出者氏名 崔佑榮

本審査委員会は、平成20年1月22日に本学駒場キャンパスにおいて、崔氏の提出した『戦時期航空機工業の外注下請システムと中小機械工業政策——三菱名古屋航空機製作所の例を通じて——』の審査を行った。

日本の戦前の経済システムが、戦後にどのように継承されたか、という問題について、かねてより「断絶説」と「連続説」との二つの見解が示されてきた。断絶説は財閥解体や労働三法などの戦後民主改革の意義を重視し、それが戦後の発展をもたらしたと主張するのに対して、連続説はアジア太平洋戦争期に形成された戦時体制が、その後も長く残存し、それこそが高度成長の基礎となった、と主張する。

後者の連続説の論点のひとつに、戦後日本経済の特徴である系列下請中小企業群がある。これは、戦時中に政策的に推進された「専属下請制」のなかから生まれてきたもので、その原点がこの時期にあることは間違いのないところである。トヨタなどの日本の有力企業が、強力な下請企業群によって支えられきたことは周知の事実であり、それが戦時中に起源を持つことは、連続説にとって重要な支柱となりうる。

ところが、戦前戦時の下請制度についての実証的研究は乏しい。というのも、この研究は膨大な数の中小企業と親企業との関係を論じる必要があるが、多数の中小企業についてまとまった資料が残存することは少なく、親会社にも下請会社についての記録は残されていないのが普通だからである。その上、たとえ資料があっても、膨大な数の企業についてのデータを解析するのは容易ではない。

崔氏の論文は、戦時中に急激に膨張し、日本経済の中心産業となった航空機産業に注目し、この研究上の大きな空白に挑むものである。日本の航空機産業の二大企業は、中島飛行機と三菱重工業名古屋航空機製作所(名航)とであったが、前者は戦後に細かく解体されたため、資料的制約があまりにも大きい。そこで崔氏は三菱名航について調査研究を行った。もちろん、このように問題設定をしても、資料的制約と分析の困難とはついてまわるが、崔氏は粘り強く丹念な調査によって資料を発掘し、面倒な解析作業を行った。

本論文ではまず、世界の戦時航空機産業の大量生産活動の総括的概観を行なう。このなかで、突出した成果を挙げたアメリカにおいてすら、それは数え切れない難問を乗り越えねばならない、困難な過程であり、日本は、そのいくつかの問題に最後まで足をとられていたことが明らかにされた。特に「標準化」という問題が最大のネックであり、アメリカでさえ標準化の推進は不十分であり、日本は標準化の必要を本格的に自覚した段階で終戦を迎えた、ということさえできる。

日本は、限られた資源と、相対的に低い技術力という厳しい条件のなかで、アメリカを向こうにまわし、高性能の航空機を大量生産するという、身の丈を超えた課題の実行を迫られた。航空機は、技術的に高度な機械であり、その部品生産においても、通常のものとは隔絶した精度が要求されるため、日本の航空機工場は部品の多くを自作する傾向があった。実際、この段階の日本の中小企業は、標準化という概念の存在すら普及していない状態であり、製品間格差を縮小するために必要とされる測定器機すらほとんど所有していなかった。日本の航空機産業は、自らの生産システムを本質的に転換しつつ爆発的に拡大するばかりではなく、膨大な数の外注工場を育成する必要に迫られたのである。

この状態に対処するために政府が推進したのが「専属下請制」である。これは、最終生産物を生

産する親工場と、その部品生産を行なう下請工場との関係を、公的承認を必要とする指定関係とし、固定的な企業取引関係をつくるというものであった。親工場は、単に製品を発注するばかりではなく、技術指導や設備貸与をはじめとする育成措置を講じ、下請工場の技術水準の向上を実現することが定められた。また、親工場を固定し、同じ部品を作ることにより、下請工場の生産性が向上することが期待された。そのために、下請工場は恣意的に親工場を変更することが禁止され、また政府は、あまりにも技術水準の低い企業は整理する方針であった。

中小企業はこのような独立性を失わしめる措置に反発したが、物資不足が深刻となって資材統制が本格化すると、優先的に資材配分を受ける親工場の下請となって、資材を獲得する必要が生じた。こうして専属下請制は、少なくとも表面上は広く展開した。

しかし、この制度は実際には十分機能していなかった。最大の問題は、「専門部品」とよばれた高性能の高級部品を生産する優秀な工場の数があまりにも少なく、そこが兵器生産のボトルネックとなっていたからである。こういった工場は、多数の最終生産物生産企業から「ひっぱり尻」となった。当時の日本の技術では、こういった製品を製造するために必要な高性能の機械を作ることは出来ず、そのうえ、優秀な技術者が次々と応召して出征する状態であり、専門部品生産工場を多数育成することは不可能であった。それゆえ、こうした「下請」企業を、いずれかの企業に専属させることはそもそも不可能であり、専属下請制は実行しえなかった。

また、より単純な部品を生産する中小工場にしても、爆発的に拡大する兵器産業の需要にこたえるためには、その時点で最も深刻な部品不足の生じている親企業から受注することが有利であり、実際、そのように親企業を頻繁に変更する工場が多かった。親企業にしても、膨大な量の注文にこたえることで手一杯であり、とても下請工場の面倒を見る余裕はなく、こちらも短期的関係によってより多くの部品を入手する必要に迫られていた。

さらにそのうえ、専属下請制を支えていた資材統制にも大きなループホールがあった。それは陸海軍である。陸軍と海軍とはそれぞれに、自分たちの武器生産をより容易にするために、激しい縄張り争いを繰り返しつつ、大量の物資を管理下に置いており、その領域には政府の資材統制も及ばなかった。軍は、全体的整合性を無視し、その場その場の都合に従って恣意的に物資を流した。多くの中小企業は、さまざまなコネクションを利用して、軍から直接発注を受けることにより、専属下請関係から離脱した。

このように、専属下請制は、政府の構想したような展開を見せず、実効性を欠いていた。政府の頭のなかには、航空機などの最終生産物を頂点に頂くピラミッド状の産業構造があったのであるが、実際の産業構造の頂点は最終生産物ではなく専門部品のところにあり、しかも麓の方は、受注先や業態を頻繁に変更する、無数の中小企業の形成する動的ネットワークによって構成されていたからである。

戦時日本経済の中核を成した航空機産業は、下請制に徹底的に依存するものであり、日本中の町で航空機産業と無関係なもの一つもない、とまで言われるほどの存在感を示した。しかしその産業は、アメリカ軍による徹底した戦略爆撃の標的となって物的に破壊されるとともに、戦後には、産業そのものが完全に崩壊した。

以上の点から、崔氏は、「専属下請制」は戦時中には機能していなかった上に、その中核たる航空機産業は物的にも破壊されたのであり、「連続説」の想定するように、その直接的な影響が戦後の発展の基礎となったとは考えられないと結論する。しかしそれは、戦時専属下請制の影響が、戦後に全く残らなかったことを意味するものではない。日本の産業は、この過程で大量生産システムの構築における標準化の重要性を身を持って理解し、それを実現する上で、工場間での長期的で緊密な関係の構築による育成という方法のありうることを理解した。親工場も下請工場も、大量生産システムの構築の過程で、数え切れないほどの難問と出会い、試行錯誤を繰り返し、膨大な知識を獲得した。こうした見えざる資産が如何に継承されたのかを明らかにすることはできないものの、それが戦後に引き継がれたことだけは、間違いなからう、と崔氏は指摘する。

崔氏の論文は、このように、日本経済史の研究上の大きな空白を、緻密な実証によって埋めるも

のである。また、これまでの日本経済史研究は、東京を中心とする首都圏と、大阪を中心とする関西圏とを主たる対象としていたが、本論文は、20世紀末から急速に存在感を強めている名古屋を中心とする中部圏の出現過程についての、最初の本格的な研究という意味をも帯びている。しかも、「連続か断絶か」という論争軸そのものを相対化し、人々の直面した問題とそれへの対応のなかで形成される経験と知識との重要性を視野に入れる必要性を明らかにし、その上で、「標準化」という概念の重要性と、航空機産業の持つ意味を明らかにした点でも注目に値する。

このような優れた内容を持つ本論文はしかし、欠点がないわけではない。

審査委員から指摘された最大の問題点は、それぞれの細かい論点を慎重に議論する姿勢は賞賛に値するものの、慎重さのあまり、各部分の議論が全体のなかでどのような位置づけを持つかが、理解しにくい部分が生じていることである。第二に、航空機産業がもたらした戦時経験の戦後への影響について、具体的に技術者の経歴などを追ったケーススタディがあれば、より説得力が増したと考えられる。第三に、中小企業政策全般を扱った第5～6章が、詳細な事実を追求するあまり、やや平板となっている。第四に、名古屋という地理的空間のイメージを膨らませることができていない。

以上のような欠点を持つものの、それは本論文の持つ潜在的な内容の深さゆえに、それを十全に発揮していない点が惜しまれる、という性格のものであり、その価値に瑕疵を与えるものではない。審査員は一致して、本論文の内容が優れており、著者の学識も十分に高いことを認めた。したがって、本審査委員会は、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。